

愛知大学人文社会学研究所・所長 伊東 利勝

人文社会学研究所は、設立3年目に入りました。それまで、愛知大学には文學會というものがありましたが、ひとつには、学外のさまざまな研究者の方々とも交流しながら研究を深化・発展させようということで、人文社会学研究所に改組しました。本格的に活動を始めたのは、昨年からです。

本日は、植田所員の企画による「社会調査の成果を社会に還元するために——調査実践をとりまく磁場と調査者の役割を再考する」というテーマでのワークショップが開催されることとなりました。昨年度の「マテリアリティの政治と『インフラ論的転回』——社会の近代性を支えるヒトモノへの問い」に続くものです。私は歴史学が専門ですが、特に今回のテーマは、これと、といいますか、人文社会学全体に通じるような問題があります。

ご承知のように、歴史学というのは文献史料や遺物（遺跡）に基づき過去を描き出すわけですが、そのとき、「史料」や「遺跡」という認定そのものについてもそうですが、描き出す人の意図であるとか、その人の置かれている政治的な状況であるとか、そうしたものがどうしても反映されてしまいます。よく、「歴史の実像」、「真実の歴史」、「本当の歴史」などと申しますが、そのようなものはおそらく無くて、どうしても、あるひとつの立場に立った歴史が描き出されていきます。

「あの時代はこうであった」、「これが客観的な歴史だ」などとして学生に講義したり、世の中へ発信したりしていますが、そうした歴史像が現代社会にとってどのような意味を持つのか、そこをこのところを考えておかなければなりません。当該の歴史像が現代社会の矛盾を暴き出すものか、それともこれを温存・助長するものかということについて注意しておく必要があると考えております。そのために、まずは自分の立場に自覚的でなければならぬことは、申すまでもありません。

今日のテーマも、ある意味、こういったことに通じるものではないかと思えます。社会調査によって描き出される社会像も、ある立場からの、そしてある意図をもって切り取られ、成形されたものと言わざるをえないからです。したがって、「何のための調査研究か」という問題意識は、常に保持しておくべきであり、たんにこれは「真実だから」、「事実だから」ということで、それを描き出した自らの立場を不問に付す、あるいは責任を回避することは、許されません。

そういう意味で、こうした問題がどのように展開されるかも含めて、私どもとしましては、本日のワークショップにたいへん期待をしているところであります。お礼が遅くなりましたが、ご登壇される先生方におかれましては、遠いところからおいでいただきましてありがとうございます。また、貴重な時間を使ってここにご参集いただきました方々にも、こうした会がより実りあるものになるという意味で、お礼を申し上げる次第です。今日は、長時間になりますが、どうかよろしく願いいたします。